



ひろば

コロナ危機と気候危機、 自粛から社会の転換へ

長野 八久

新型コロナウイルスの世界流行は、それがとりわけ社会的インフラの脆弱あるいは破壊された大都市貧困層、紛争地域を直撃し、大きな災禍となって人々に襲いかかることを我々に見せつけるものとなった。また、様々な社会的活動の規制、自粛によって、突然に経営や生活の困難に直面する人々が多数生まれる事態となった。さらに大学においては、学生たちは対面講義を1度も受ける機会もないまま、夏休みを迎えた。

8月9日現在世界で70万人を超える死者をもたらしているコロナ危機は、決して一過性の天災ではない。その危険はかねてより警告され、起こるべくして起こった¹⁾。中国の一地方で起こった動物からヒトへの感染が、瞬く間に世界中に広がったのは、今日日常的な人間の移動が全球規模になっているからに他ならない。コロナ危機は、我々が日常を謳歌している文明に対する自然からの容赦のない反応であるという意味において気候危機と同じく、現段階の文明がもたらした人災である。

コロナ危機は、今日の文明が引き起こすあらゆる構造的暴力が相互に関連していることを、学生たちも当事者として巻き込みつつ、顕在化させた。学生たちは日常の困難に戸惑いつつも、それらについての貴重な学びの機会を手にしたのである。教員は学生たちの主体的な学びを最大限援助しながら、コロナ危機から新しい教育実践を開拓していかねばならない。

大阪大学で2003年以来継続している平和講義「平和の探求」は、これまででも、学生たちに狭い専門的関心に閉じこもるのではなく、実は日常生活の中にあふれている様々な暴力に気づかせ、自らの課題とさせることに腐心してきた²⁾。その中で、環境破壊や気候変動問題も構造的暴力の最たる事例として取り上げられてきた。今年度はコロナ危機がもたらす様々な暴力を取り上げつつ講義

が展開された。最終回の総合討論は、オンラインで3つの会場を設定し、学生たちによる討論が行われた。以下にその1つ「気候変動と私たちの未来」の例を紹介する。なお、受講生たちは、第6回講義「気候変動と平和」で、IPCC2018年報告や、各国の対応などについて学習している。

はじめに助言者の教員（長野）から学生たちに、討論のきっかけとして、「コロナ危機と気候危機の共通点は何か」と問いかけた。なかなか即答できない学生には、コロナでの日常生活の困難なども発言させつつ、どうやらどちらも世界中で大都市に人口が集中しつづけていることが大きな原因となっているらしいことが引き出された。

討論は、「それではなぜ理想的な分散型の社会に進まないのか、若者はなぜ大都市に向かうのか」に進んだ。私たちの生活を支える基幹産業であるにも関わらず第1次産業は収入が不安定、地方は最低賃金が低い、就職口がないなど、自分自身の将来とも関わって、学生たちの発言は続いた。

あるべき社会の姿が見えてきたところで、最後に助言者から「ではどのようにすれば分散型社会を実現できるのか」を問うた。学生たちは既に講義で、「構造的暴力は構造の転換によってのみ解決される」ということを学んでいる。これらの課題は個人の努力だけで解決できるものではなく、国会で議論を尽くし、国の政策として実行されて行くべきものである。自分たちはそのような政治を作らねばならないという結論に行きついた。

注および引用文献

- 1) ジョーンズ・ホプキンス大学健康安全保障センター：The Characteristics of Pandemic Pathogens (2018年5月10日)。
- 2) 長野八久：「身近な暴力を発見し、平和の探求を自らの課題に—大阪大学における平和教育」『日本の科学者』53 (1), 57 (2018)。

(ながの・やつひさ：大阪大学、生物熱力学)